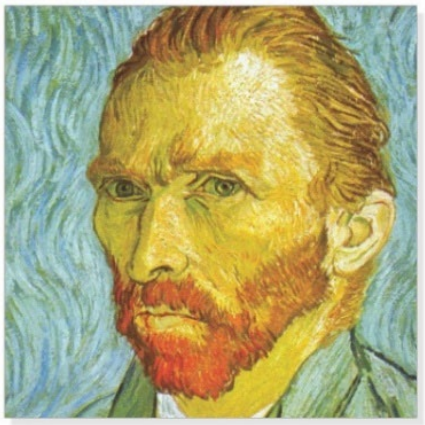
樹木と絵画の交差点

第３回　～ゴッホとアーモンド～

　フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）は、オランダ出身の後期印象派の画家です。「ひまわり」の燃えるような黄色いタッチ、「星月夜」の不安げにうねる糸杉、その他にもオリーブの木や葡萄畑など、たくさんの樹木や植物を描きました。目に見える樹木の形を通して、ゴッホは自身の燃えるような内面を画面に託したかのようです。

　ゴッホの生涯は苦難と挫折に満ちています。若いころに勤めていた美術商には解雇され、次に貧しい人々のために働く伝道師を志しますが、熱心すぎる活動のせいで聖職につくことは叶わず、その後に画家を目指しました。制作に没頭し、わずか 10 年の活動期間で、残した作品の数はなんと 2000 点以上。最大の理解者である弟テオドルとは頻繁に手紙のやり取りをしました。この書簡から、ゴッホの絵に対する情熱や理想がいきいきと伝わってきます。



フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）
「自画像」（部分）（1889 年）　オルセー美術館蔵
苦難と挫折の生涯を送った「炎の人」。「100 年後を生きる人々の心にも届く作品を残したい」と語った。

タンギー爺さんと浮世絵

　ゴッホはオランダ、イギリス、ベルギーを転々とした後、弟テオドルを頼ってパリへ転居します。

　モンマルトルにある画材屋兼画商のタンギー爺さんの店は、ロートレックやルノアールをはじめ、印象派と呼ばれる絵描きたちが集まる場所でした。ゴッホもそのうちの一人です。タンギー爺さんは、お金がない画家に絵具を貸し、作品を店に飾り、時には宿まで提供するなど、若い画家の庇護者的存在でした。ゴッホの書簡の文面にもよく登場します。

　「やっぱりタンギー爺さんに絵具を頼まなかったのを残念に思った。…中略…　でも、実に変わった人物だ、だから、よくあの爺さんのことを考える」（ゴッホの手紙：テオドル宛）

　その頃フランスでは、ジャポニスム（日本趣味）が流行しました。中でも浮世絵は、その単純な線描や明るい色彩感覚が、ゴッホをはじめヨーロッパの若い画家たちに刺激を与えました。

　「僕は、日本人がその作品のすべてのものにもっている極度の明確さを、羨ましく思う。…中略…　彼らの仕事は呼吸のように単純で、まるで服のボタンでもかけるように簡単に、楽々と確かな数本の線で

人物を描きあげる」（ゴッホの手紙：テオドル宛）

ゴッホは貧しい生活の中、浮世絵に傾倒していき、数百点におよぶ作品を収集しました。そしてゴッホの絵の重く沈んだ色調は、少しずつ明るく変化していきます。

タンギー爺さんの肖像（1887 年）
ロダン美術館蔵

ゴッホは肖像画のためのモデル調達に苦労しましたが、タンギー爺さんはモデルを引き受けてくれる数少ない貴重な人物でした。タンギー爺さんへの日ごろの感謝の気持ちが丁寧な描写の中に読み取れるようです。
この絵の背景には５点の浮世絵が模写されています。
右上部の浮世絵の模写は、歌川広重作「五十三次名所図会 四十五 石薬師 義経さくら範頼の祠」。
描かれているのは三重県鈴鹿市の県指定天然記念物「石薬師の蒲桜」です。

歌川広重
五十三次名所図会 四十五 石薬師
義経さくら範頼の祠

春待つアーモンド

その後ゴッホは、”絵描き同士で一緒に生活をして共同体をつくる” という理想を掲げ、パリから南仏アルルへと移住します。しかし、アルルで始めた画家ポール・ゴーギャンとの共同生活は全く噛み合わず、悲惨な耳切り事件が起こります。ゴッホは精神に異常をきたし、自ら入院したサン＝レミ精神療養院で、たびたび起こる発作に悩まされながらも絵の制作を続けました。そんな中、弟テオドルに子供が生まれるという知らせが届きます。名前はゴッホと同じ ”フィンセント“ にするということも知らされました。ゴッホは喜び、子供の誕生を祝う気持ちで新しい絵を描きはじめます。

絵のモチーフとして選んだのは、ほころび始めたアーモンドの枝です。

花咲くアーモンドの枝（1890 年）
ファン・ゴッホ美術館蔵

澄んだ穏やかな青が印象的です。青が画面にみなぎってゴッホの晴れやかな心境を思わせます。
簡潔な線でいきいきとの枝や花をとらえた描写や、シンプルな背景に暗示された奥行きは、浮世絵からの影響を自分のスタイルへと昇華しています。
今もゴッホ家にとって宝物のような作品として、代々受け継がれているそうです。

ゴッホはパリ時代に歌川広重の「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」を油絵で模写※注しています。その後アルル時代にはアーモンドを描いています（下図版：「グラスの中のアーモンドの花」、「Almond Tree in Blossom」）。アーモンドは南仏によく植栽されていて、ウメやサクラにそっくりな花を咲かせます。浮世絵や日本画にはよく白梅が画題として描かれるので、ゴッホがアーモンドを描くとき頭の片隅には浮世絵を通じて思い描いた日本の風景があったのかも知れません。

厳しい寒さに耐えて、冬枯れの野に春を待ちわびたように咲くアーモンド。ヨーロッパでは春の訪れを告げる吉兆の花とされています。ゴッホは自分自身とアーモンドを重ねたのでしょうか。

グラスの中のアーモンドの花（1888 年）
ファン・ゴッホ美術館蔵

Almond Tree in Blossom（1888 年）
ファン・ゴッホ美術館蔵

アーモンドについて

アーモンド開花の様子
撮影場所：神代植物公園（東京都調布市）

アーモンド（*Prunus dulcis*）はバラ科サクラ属モモ亜属の落葉高木です。原産はアジア西南部。サクラによく似た花を咲かせます。栽培・食用の歴史は古く、最初は遊牧民の携帯食として広まり、しだいにメソポタミアのどの古代文明でも食べられるようになりました。旧約聖書、ギリシャ神話にもたびたび記述があります。地中海性気候（夏の乾燥が厳しく、冬には一定の雨が降る）によく順応していき、ヨーロッパ・地中海沿岸やアメリカ西海岸で栽培が根付いていきました。日本では小豆島で多く栽培されています。

兵庫県神戸市建設局東水環境センターの魚崎運河沿いには約 100 本のアーモンドが植栽されていて、3 月下旬頃の花の時期に合わせて音楽イベントも開催されます。また静岡県藤枝市葉梨地区では、里山保全・放置竹林対策の一環として「アーモンドの里づくり」を進め、アーモンド約 150 本が育てられています。

注

日本趣味：梅の花（広重を模して）
（1887 年）
ファン・ゴッホ美術館蔵

«引用文献»
「ゴッホの手紙」（テオドル宛）中巻　J.v.ゴッホ-ボンゲル編　硲伊之助訳　岩波書店（岩波文庫）1961 年　p.52、p.276
«参考文献»
「展覧会カタログ　オランダ クレラー=ミュラー美術館所蔵 ゴッホ展」横浜美術館　1995-1996 年